

40. 歯科保存修復学基礎実習における項目別窩洞形成評価：第1報 学生自身による窩洞の自己評価(一般講演)(東日本歯学会第12回学術大会(平成6年度総会))

著者名(日)	横内 厚雄, 畑 良明, 川上 智史, 原口 克博, 宮田 武彦, 飯岡 淳子, 大沼 修一, 尾立 達治, 長岡 央, 野田 晃宏, 豊岡 広起, 平本 正樹, 荊木 裕司, 松田 浩一
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	13
号	1
ページ	170
発行年	1994-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007980/

内X線写真撮影の実習を行なっている。そこで今回われわれは、臨床実習生の口腔内X線写真撮影における失敗の傾向を知るとともに、今後の実習の指針とすることを目的として、撮影の失敗頻度を客観的に評価し検討した。

放射線科で行なった、学生間相互で撮影した10枚法口腔内X線写真から抽出した合計1030例（総計1030枚）を対象として失敗の評価項目に従って分類した。

評価の結果、何らかの失敗が認められた写真は約60%であった。項目別では垂直的角度フィルムの位置、水平的角度の順が多かった。撮影部位別では、下顎両側小白歯部が約80%と最も多かった。失敗項目別では、垂直的

角度の不良は下顎左右小白歯部に多く、水平的角度の不良は上顎、特に左右小白歯部に多く認められた。フィルムの位置付けは、下顎小白歯部に多く、コーンカットとフィルムの裏返しは少なかった。実習生一人当たりの失敗枚数は1～9枚で平均5.4枚であった。

本調査から撮影部位によって失敗頻度にはっきりとした差があり、原因にも明確な傾向が認められた。再撮影枚数の減少は、不当な患者被曝を避けるうえでも重要であることから、今後は評価結果を踏まえて、限られた実習時間内で成果をあげられるよう指導することが課題であると思われる。

40. 歯科保存修復学基礎実習における項目別窩洞形成評価

—第1報 学生自身による窩洞の自己評価—

横内 厚雄, 畑 良明, 川上 智史
原口 克博, 宮田 武彦, 飯岡 淳子
大沼 修一, 尾立 達治, 長岡 央
野田 晃宏, 豊岡 広起, 平本 正樹
荊木 裕司, 松田 浩一

(歯科保存学第二)

歯科大学において、学生は基礎実習に入る前にあらかじめ基礎歯学および臨床歯学の講義によって実習に関する基礎的知識を得る。

さらに実習中における指導教員によるデモンストレーション、アドバイス、形成された模範模型などにより知識と情報を得ている。

しかし、指導する側からすると、これらの知識や情報が学生にどれだけ理解されているかを把握することは困難である。

今回我々は、基礎実習における教育効果を向上させるため、上顎右側第1大臼歯に2級スライス型インレー窩洞を形成させ、井上らの自己評価表を参考に作成した項目別評価表に従って、教員の説明を受けながら自己評価を行い、同時に教員も学生の作品に対して同様の評価を行った。そこで、指導教員との評価の違いを明らかにするとともに、前期実習時における達成度と後期実習時における達成度との比較を行ったところ以下の結論を得

た。

1. 項目別窩洞判定において教員、学生間の窩洞そのものに対する認識に大きな差は認められなかった。
2. 裂溝に関して過度に追求する傾向が存在したが、後期実習では改善の兆しが見られた。
3. スライス面に関しては、近心咬頭を過度に切削する傾向があった。
4. 凸隅角部の整理、窩壁の滑沢度に対して、低い評価を学生自身が下した。
5. 後期実習において学生は、ほぼ全ての項目で上達したと自己評価した。
6. 項目別窩洞評価法は、学生が自分の窩洞形成に対し正しく評価して技術を上達させるのに有効な手段であると考えられる。

今後は、全ての実習課題においても自己評価法を用いて教育の効果を挙げて行きたいと考えている。